

断し、治療にあたる現場の立場からこう指摘する。

「ペットが亡くなったことによる精神的な苦痛は、普通は2か月もすれば治まるのですが、それ以上、続いている場合は、要注意です。喪失感や孤独感、罪悪感に加え、集中力の欠如や不眠、食欲不振など、うつ症状が表れてくることもあります」

ペトロスを克服するにはどうすればいいのか。前出の吉田さんは、「対処の心得4か条」(別掲)を示し、こうアドバイスする。

「悲しみにくれるのは自然なことと認識し、まず思い切り泣いてみることです。それが、自分自身を癒やすことにもなります。次に、ペットの写真をアルバムに整理してみたり、絵に描いてみたりして、「あの子」との思い出を形として残していく作業も、立ち直りを後押ししてくれると思

います」

さらに、ペットが自分より先に死ぬものと自覚することや、ペットに依存しないように適度に心の距離をとることなどを勧め

る。しかし、いずれは向き合わなければならぬペットの死。そうした飼い主の心の悩みに配慮して、葬祭関連業界でも、新しいビジネスやサービスの動きが相次いでいる。

ペットの骨も遺族の墓に

04年6月に開園した清岸寺・小豆沢墓苑(東京都板橋区)では、ペットと人間の遺骨を一緒に墓に納骨することができ。墓所使用者約400軒のうち3分の2が、すでに遺族とペットの遺骨を納骨していたり、ともに生きているうちから、契約して

いる人もいる。墓苑内には、「心緒庵」と呼ばれるペット専用の礼拝堂もある。

鈴木悠広副住職の話。

「愛するペットと死後も一緒にいたいという人たちには、好評です。ペトロスの苦しみも、ずっと共にいられると考えると、軽減されるようですね」

また、多摩川ドグウッドクラブ(川崎市)では、ペットの葬儀の際には、音楽やアロマの香りなどで「心を癒やすセレモニー」を心掛けているほか、カウンセリಂಗールムを設け、要望に応じてペトロ

ペットと遺族と一緒に眠る墓。墓石には10匹の猫の名前が刻まれていた＝東京都板橋区の小豆沢墓苑で(吉川努撮影)



スの専門家を招いた相談も行っている。

今、ペットとヒトとのかかわりは、どう変化してきているのか。

著書「家族ペット」で、両者の家族的な関係性を説いた山田昌弘・東京学芸大学教授の分析は、こうだ。

「本来、家族に求めていた安ら

ぎや癒やしをペットに求める人たちが増えていきます。実際の家族は忙し過ぎたりして、自分の期待に応えてくれない。つまり、理想的家族をペットに代理させているのです」

ただ、ペットに求め過ぎるのは禁物という。

「人間に必要な感情体験をペットが与えてくれているという点では、いいことです。しかし、ペットに家族的役割を期待し過ぎてしまうと、「(本来の)家族はもういない」となりかねない。家族への期待の一部をペットに求めるぐらいが、ちょうどいいのではないのでしょうか」

増え続けるペトロス。変わる家族のかたち。その狭間で登場してきた鎮魂ビジネスは、まさに「癒やされたい現代人」の心の葛藤を色濃く反映している。